

縄文時代の狩猟

先史時代は、移動しながら狩猟・採集の暮らしが長かった。縄文時代の前期くらいから定住がはじまるが、地域差もある。

生業の基本は自然の植物の採集であり、狩猟であった。その痕跡は、打製石斧（鍬や鋤として）、石鏃（矢尻）であり、縄文晩期の三島町荒屋敷遺跡ではマユミの木製弓も5張確認されている。一方、捕獲対象となった鳥獣類は、骨が酸性土壌では残存することが少ないため、洞窟遺跡や貝塚での骨を調べることになる。

柳津町の縄文時代中期の石生前遺跡からは1991年に公刊された報告書で、昭和61年、62年の発掘調査で動物遺存体（骨の小破片）が出ている。いわき短期大学の山崎京美氏が同定してい（311ページ）る。

1～2cmの骨片は、すべて焼けており灰褐色が多かった。熱による収縮や亀裂があることから強い熱を受けていた。516点の骨片のうち同定できたのは26点。時代は縄文中期が中心である。

縄文中期ではヒキガエル科2点、イノシシ16点、ニホンジカ4点。縄文後期ではイヌ1点、テン1点、イノシシ1点。イノシシには幼獣が含まれている。

出土状況からは、発見された場所とは別の場所で焼かれたと考えられている。そして骨髓食のために打ち割られ、その後に焼かれ砕かれ撒かれたと推定されている。

獣骨を何らかの目的で焼き、一定の場所に集める行為は、縄文中期以前のかかなり古い時期まで遡る習慣で、配石遺構に伴って顕著なあり方を示すのが中期以降。晩期に至るとともに焼骨の量が増大し、特定の種類あるいは部位を埋存する傾向がある。

会津地方では高郷村の博毛遺跡、只見町の窪田遺跡に類例がある。博毛遺跡では国立科学博物館の馬場悠男氏によりイノシシ、シカ、タヌキ、カエル、ヘビと同定された。

只見町の窪田遺跡では縄文晩期の住居跡から3ブロックの骨片集積が確認された（『只見町史第1巻』2004年、110ページ）。

獨協医科大学の桜井・茂原両氏による骨片同定によるとシカ31点、クマ6点、ウサギ1点、トリの骨であった。

両遺跡を調査した古川利意氏によれば、窪田遺跡にはイノシシが無く、博毛遺跡にはシカが少ない。焼骨であり、長管骨が少ない。細かく砕かれ骨髓食が行われていた。

さて、『石生前遺跡Ⅱ』（1996年）は三島町名入の小柴吉男氏が発掘を担当されたのだが、縄文前期中葉の「陥し穴土抗」（小柴氏の文字表記判断）を検出している。

芳賀英一さんが調査された『冑宮西遺跡』（『福島県文化財調査報告書227：国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告8』1990年）でも「落とし穴土抗」について論考している。

いずれも動物を捕獲するための狩猟の装置である。

昭和村大芦では『中坪A遺跡』（2018年）で縄文前期末から中期前半の狩猟場として落とし穴土抗12基が確認されている。定住化が進んだ縄文前期から落とし穴が作られるようになり、そこでシカやイノシシなどを捕獲したものだろう。

（写真は昭和村の中坪A遺跡の落とし穴列）

